宗像

沖津宮神迎へ神事

～沖津宮御神璽（ごしんじ）、中津宮内陣へ仮鎮座～

十月一日の秋季大祭「みあれ祭」に先立ち、沖津宮の御神璽を大島の中津宮にお迎えする「沖津宮神迎へ神事」が去る九月二十日厳粛に斎行された。

当初は九月十二日に予定されていたが、海上の波高が三メートルの大時化となり沖ノ島渡島を断念し、翌週の二十日斎行となった。

前日の十九日に高向宮司以下奉仕神職三名が大島へ渡島、参籠潔斎し翌朝午前六時「国家鎮護」の大幟、紅白の吹流し、船首に「波切り御幣」をつけた御座船「伸洋丸」（船長＝宮本敏喜氏）に、神職以下関係者が乗船し大島港を出港した。

海上は凪であったが、にわか雨にあいながらも、午

神職が奉持し出御される沖津宮の御神璽

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪

第六十二回神宮式年遷宮

10月祭事暦

1～3日 秋季大祭

15日 月次（つきなみ）祭

午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭

午前11時～
総社祭
豊栄舞奉奏

17日 表千家献茶祭

午前11時～

象は現在生息する最大の陸上生物であると共に動物園の人気者である。我が国でも『日本書紀』にその存在が記され、古名を「きさ」と呼ぶ。室町時代には南蛮船で度々渡来したが、江戸時代に鎖国となり只一回吉宗公が関心を示され象を呼び寄せた▼当時の人々の驚きは大変なもので時の帝は、「広南従四位白象」と官位を授け、民衆はこの動物に関心を寄せ大流行となった。『象志』など様々な本の出版、多く浮世絵などで今に残る▼時を経て平成、象を身近に出来る動物園受難の時代が到来した。少子化による入園者の減少、自治体の財政難が重なり苦戦している。宗像近郊の北九州・到津の森、福岡市両動物園でも有名な旭山動物園を参考にサポーター制度を作るなど、往時から見れば涙ぐましい努力を続けておられる▼動物園も我が国の法制度の中では社会教育法・博物館法の枠での扱いだ。当大社も御神宝を収蔵・展示する博物館「神宝館」を持つ。動物園の受難も決して他人事では無い▼象の生の姿を日本の子供達が今後も身近に見る事が出来る様願ってやまない。それはとりもなおさず我が国の少子化の克服、国力の回復にある。民主党代表選で再選された菅首相に課せられた責務は非常に重い。（佐）

神具・装束・授与品
井筒
装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401 フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23 フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元4丁目1-20 電話(0940)32-2567

前八時前に無事沖ノ島に到着した。一同直ちに海中にて禊をし、沖津宮本殿で出御祭が斎行された。

高向宮司が祝詞を奏上し、御座船奉仕者の宮本氏、沖・中両宮奉賛会より河辺紘氏、先月就任された権田仁八郎海洋神事奉賛会長、宗像漁協大島支所の山口國一理事、大島駐在所の吉村賢二氏氏らが玉串を捧げた。

そして神職が御神璽を捧持し、御祓いをしながら参道を下り御座船に奉安、一行は再び大島中津宮へ向かった。

正午大島港に到着、陸上神幸しながら、大島駐在所の吉村氏の先導により中津宮迄御神幸、同宮本殿で入御祭が斎行され、本年度の沖津宮神迎え神事は滞り無く終了した。

尚、中津宮本殿内陣に仮鎮座された沖津宮御神璽は、中津宮の御神璽と共に十月一日の「みあれ祭」で海上神幸される。そして、お迎えされる辺津宮御神璽と年に一度の再会を果たされ、総社・辺津宮内陣に三宮の御神璽が奉祀され三日間の秋季大祭がはじまる。

大島港に到着

御座船に入る御神璽

中津宮へ入御

宗像大社海洋神事奉賛会開催

～新会長に権田仁八郎氏就任、村田繁美会長御退任～

新会長の権田仁八郎氏

八月三十一日、当大社斎館にて海洋神事奉賛会秋季大祭打ち合わせ会が開催された。

同会は宗像七浦の漁協関係者・水難救済会の方々より構成され宮中への若布献上と、みあれ祭の諸行事を毎年一丸となり御奉仕を頂いている。

今回は今年の秋季大祭にあたり、海上神幸（みあれ祭）・陸上神幸の打ち合わせが主題であるが、冒頭かねてより退任を希望されていた村田会長より退任挨拶があり、新会長選任については審議の結果、鐘崎漁協の権田仁八郎組合長に就任を頂いた。

引き続き秋祭祭典行事について協議があり、今年も七浦の漁業者を挙げて奉仕頂き盛大な神事となる運びとなった。

村田繁美会長には、平成十年御就任より十二年間に亘り当大社の海洋諸神事斎行に御尽力を頂きました事を深く感謝申し上げます。また権田新会長様におかれましては就任を御受諾を感謝申し上げると共に御指導賜わります様何卒よろしく申し上げます。

宗像大社菊花会 定例理事会

十一月一日開幕の西日本菊花大会に向けての最終確認の為、九月十二日九州各県・山口より千々和正信会長以下五十六名の理事の方々が参集され、当大社清明殿で理事会が開催された。

本殿で正式参拝の後、理事会は始まり第四十回西日本菊花大会開催の件等報告、各会出品申し込み・搬入・搬出の件等が話し合われた。

四十周年記念事業の件では、特別花壇作成や記念誌発行について報告がなされた。また四十周年記念研修旅行は全国大会（全日本菊花連盟主催）が開催される兵庫県宝塚市が予定されており、多数の参加が呼びかけられた。

会議終了後は、一同斎館で名物の地鶏のすきやきを囲みながら、菊花の生育状況等の話題で親睦を深めた。

今夏は酷暑が続き菊花の成長は思わしくない様子であったが、本年は四十回の節目にあたる記念大会であり、会員の皆様には多くの菊花を出品頂ければと存じます。

氏子総会総代

～秋季大祭氏子奉幣使は、松井善徳副会長に～

九月十四日、今年度第二回目の氏子会総代総会が、置鮎会長以下一〇八名出席の下清明殿で開催された。

神宮並皇居遥拝、国歌斉唱、敬神生活の綱領を唱和し、会長・宮司挨拶の後、来賓挨拶として福岡県議会議員阿部弘樹氏より挨拶を賜り議事へと入った。

置鮎会長が議長に選出され議事の審議に入り、事務局より秋季大祭を中心とした議案の説明が行われ全て原案通り承認された。

本年の秋季大祭氏子奉幣使は、慣例により旧玄海地区より選出いただくこととなり、会議後の協議の結果、氏子会副会長の松井善徳氏に御奉仕いただくこととなった。

松井氏には奉仕の前日に来社いただき、神社の斎館で参籠潔斎、祭式作法の温習をしていただき二日祭に御奉仕いただく。

この三日間に亘る秋季大祭時には、「みあれ祭」に大島の総代さんが、神輿が頓宮へ向かう陸上神幸では神湊の総代さん、大祭二日目早朝の流鏑馬神事では田島の総代さん、さらに本殿では各地区選出の役員・評議員の皆様に、大祭受付や氏子会費の受付を御奉仕いただくこととなっており、氏子会組織挙げて斎行される。

本年は金・土・日曜日と週末の斎行となっており、多くの皆様のご参拝をお待ちしております。

平成二十二年度 学芸員実習開催

去る八月十六日～二十六日にかけて当大社では学芸員実習が行われた。本実習は、大学で学芸員資格取得を志し博物館学芸員課程を履修している学生を対象に当大社文化財管理事務局が毎年この時期に実施しているものである。今年は、県内外の大学生九名が受講した。実習は、当大社職員とともに朝拝へ参列するところから始まる。学生は毎朝、心身を清らかにし、気持ちを引き締めて実習に向かった。

宗像市の指導による土器の接合作業

実習では、あらゆる観点から専門的、実務的事項を学んでいく。実習前半は講義、後半は実務が中心となるカリキュラムが組まれた。具体的には、神道とは何かを説いていく講話（堤文化財管理事務局長）、沖ノ島祭祀の様子と宗像一族の動向にせまる考古学講義（松本肇氏）、当大社の繁栄を述べた中世文書から古文書の基礎を学ぶ講義（河窪学芸員）、絵馬の歴史を説く民俗学講義（楠本正氏）、漂着物学及び市民との相互理解・相互協力による博物館運営のあり方を学ぶ講義（ともに石井忠氏）、科学的観点から文化財保護を考える講義（横田義章氏）、当大社の文化財事業の取り組みを学ぶ講義（重住学芸員）などのほか、実務実習として、刀剣の手入れ（藤川宣重氏）、拓本採り（松本肇氏）、展示品のキャプション原稿作成（河窪学芸員）、展示キャプションとパネルの制作と展示作業（重住学芸員）なども行った。また、文化財の活用と継承の取り組みへの理解を深めるために、宗像市職員による文化財行政についての講義と実務実習を受け、芦屋町立芦屋釜の里並びに芦屋歴史の里の見学も行った。

芦屋歴史の里を見学

展示作業の様子

神を祭る神域で行う実習とあって、学生は初めは緊張した面持ちであったが、講義と実務の折々で、学びの種を知り、文化財の研究・活用・保護の実状と意義を理解していくうちに、その表情は実に活き活きと充実に満ちたものとなっていった。学生は「学芸員になる」という志がいよいよ強まったようだ。当大社実習の受講生から学芸員が誕生することを期待したい。

沖ノ島にくらす生きものたち Vol.3

沖ノ島に生息する哺乳類

鹿児島国際大学　国際文化学部
生物学研究室　教授　船越公威

これまで記載されていた哺乳類

沖ノ島は玄界灘に浮かぶ孤島であり、生物地理学的にも興味深い島です。今回、福岡県希少野生生物調査の一環として、参加させていただきました。沖ノ島の生物相について、これまで数度の学術調査で報告されました。その中で、哺乳類に関しては、1955年6月に捕獲されたジネズミについて、オキノシマコジネズミとして記載されました。最近では、ニホンジネズミとして分類されていますが、DNA解析による系統的な再検討が必要です。

その後、1958年7月に調査され、不明だったネズミ類について広範囲にワナを設置して捕獲が試みられ、捕獲されたすべてがクマネズミでした。本種が全島に広く分布していてオオミズナギドリと共生している点で注目されました。一方、不明のコウモリ類は確認されず、食肉類は全く生息していませんでした。クマネズミについてはその後の1986～1994年に福岡県の調査によって1992～1993年を除き毎年捕獲され、1992～1993年にはドブネズミも捕獲されました。

シャーマントラップ

ピットトラップ

今回の調査で確認された哺乳類の生息状況

今回の調査では、シャーマントラップ（餌で誘引して捕獲する箱状のワナ）とピットトラップ（落下した個体を捕獲する鉢状のワナ）を設置し、食虫類のニホンジネズミの採集を試みました。しかし、過密化したオオミズナギドリの活発な動きで、シャーマントラップは蹴散らかされ、ピットトラップには落葉が入り込んでしまい、また仕掛けた餌にアリがすぐに集まってしまって、捕獲は失敗に終りました。それにしても、腐植土層は貧弱であったため、ニホンジネズミの生息環境が劣化し、個体数が極めて少なくなったのではないかと思います。

齧歯類の捕獲では、港付近でハツカネズミ2頭、クマネズミ1頭、ドブネズミ3頭が捕獲されました。一方、宗像大社沖津宮への参道から灯台に向う道沿いでドブネズミ2頭が捕獲され、さらには一ノ岳山頂（標高243メートル）付近の標高200メートルでドブネズミと思われる大型のネズミが目撃されたことから、ドブネズミが島の広範囲に分布しているようです。ドブネズミは繁殖期のカンムリウミスズメにとって天敵であるため駆除が急がれます。

港近くの参道ではノネコが目撃され、また山林ではノネコに襲われたとみられるオオミズナギドリ1羽の死体が発見されました。ノネコについては、福岡県などが1991～1993年と1998～1999年に捕獲してほぼいなくなったとのことですが、まだ根絶できなかったようです。これも駆除が急がれます。

これまで不明のコウモリ類について、カスミ網による捕獲とバットディテクター（コウモリが発する超音波を可聴音域に変換して音声探査する

沖ノ島で捕獲されたアブラコウモリ（メス）

装置)の利用によって、調査しました。また、岩盤の割れ目をねぐらにするコウモリ類を探すため、港から海岸線に沿った一部を踏査してみました。

山の中腹の林内に設置したカスミ網では捕獲されず、コウモリの音声も聞かれなかったので森林棲のコウモリ類はいないようです。また、岩盤の割れ目でコウモリを探しましたが、発見できませんでした。しかし、偶然にも港の水場近くで休息中のアブラコウモリ雌1頭を捕獲することができました。このコウモリは家屋をねぐらにしていることから、付近の建物のちょっとした隙間をねぐらの出入り口として利用していると思われます。夜には本種の音声が聞かれ、港周辺を飛翔しています。個体数は少ないようですが、停泊する漁船に入り込んでいたものがこの島に移り住んだのでしょう。

沖ノ島カスミネットを設置

また、港から沖津宮への参道の上空や港付近の林縁の上空で少し大きめのコウモリが飛翔していたため、カスミ網を設置して捕獲を試みました。しかし、カスミ網より高いところを飛翔・旋回していたため捕獲することができませんでした。一方、録音できた飛翔中の探索音の解析によって音声を照合した結果、周波数25キロヘルツ前後を示すヒナコウモリと判明しました。このコウモリは、沖ノ島から南方へ約60キロメートル離れた玄界島付近の大机島にも生息しています。この島の海食洞の天井の割れ目に春～秋季に1、000頭前後の出産・哺育集団を形成しています。今回の調査でねぐら場所を確認できなかったものの、ヒナコウモリは広い範囲で生息していて、島と島の間を移動しているでしょう。

かつて、1944年5月に沖ノ島で停泊中の船内からオヒキコウモリ雌1頭が採集されました。これが本種の日本における最初の記録です。また、1985年10月に福岡市西新の学校内で本種の亜成獣雌1頭が発見されました。今回、海岸に沿った岩盤の割れ目を踏査した際、宮崎県の枇榔島に生息するオヒキコウモリのねぐら場所と類似した割れ目があったことから、オヒキコウモリの生息の可能性も捨てきれません。今後、沖ノ島北部の断崖も調査する必要があるでしょう。ヒナコウモリやオヒキコウモリの翼は狭長型で高速・長距離移動できますから、今後の調査によっては、近隣の対馬や壱岐さらには韓国の間で移動交流があるかもしれません。

大机島のヒナコウモリ

表参道トイレ上棟祭斎行

～参道拡幅工事も始まる～

晴天に恵まれ残暑厳しい九月十日、新築中のトイレの上棟祭が、高向宮司、施行中の㈱弘江組・中野順社長、設計を担当された河上信行氏以下関係者が参列し、神職二名奉仕の下斎行され、工事の進捗を祝い、無事竣工が祈念された。建物の輪郭も姿を現し始め、十二月の竣工が待ち遠しい限りだ。

また既報の通り、トイレ新築工事に併せての参道拡幅工事も同十六日着工され、こちらも年内には完了する予定。これに先立ち十四日には、参道改修奉告祭が施行業者である内山緑地建設㈱関係者参列の下斎行され、現在進行中である。この拡幅工事により、秋祭、正月参拝時の混雑緩和、第一駐車場から参道への参拝が円滑になる事が期待されている。

新築トイレ、表参道拡幅によって、来年の正月参拝には便宜が図られ、第一鳥居周辺は今までと全く違った様相となるだろう。

第34回

東西神社人親善野球出雲大会

～神宮チーム優勝、当チームは五位～

八月十七～十九日、第三十四回東西神社人親善野球大会が出雲大社の当番により開催され、東京以西の六チーム約一四〇名の神社関係者が出雲大社に参集した。

各チーム毎に正式参拝、その後「平成の大遷宮」で御修造中の御本殿を特別に拝観させて頂いた。

夕刻からは島根ワイナリーで役員・選手歓迎会が開催され、その場で抽選会も行われ、翌日の対戦相手が決まった。

翌十八日、浜山公園野球場で開会式が行われ、出雲ドーム球場とに分かれ猛暑の中熱戦が繰り広げられた。

当チームは初戦、昨年優勝の兵庫県チームと対戦。一対一で迎えた中盤、先発の竹内（太）が足を痛め、急遽大塚（宗）が登板するも準備不足がたたり一挙に四点を失う。そのまま最終回を迎え何とか一点は返したものの、結果五対二で敗退した。

昼食後の順位決定戦では、出雲・金刀比羅チームと対戦、当チームはエース神島崇（太）が先発し、攻撃においても初回から集中打を見せ六対一で勝利し今大会を終えた。

決勝戦は昨年と同じ組み合わせで、神宮チーム対兵庫県チームとなり他全チームが見守る中、初回から神宮チームが得点を重ね大差で優勝を決めた。

最終日は島根県立古代出雲歴史博物館を一同拝観、中央ロビーで直径約三メートルの宇豆柱や荒神谷遺跡から出土した銅剣三五八本の展示に圧倒され、古代出雲の文化伝承に触れさせて頂き本年の大会日程の全てを終えた。

宗像大社刀剣展のご案内

秋の深まりとともに、恒例の刀剣展の
開催が近づいてきました。
当大社が収蔵する奉納刀を中心に
鍔などの刀装具も展示します。
皆様のお越しをお待ち申し上げます。

会期 平成22年10月30日(土)～11月23日(祝)

時間 午前9時～午後4時30分

会場 宗像大社神宝館1階展示室

入館料
- ●大人 500円
- ●大学・高校生 300円
- ●中・小学生 200円

※15名以上は1名につき100円引き

※なお、展示替え作業のため、下記日程については、
2階・3階展示室を拝観いただく形で開館いたします。
1階展示室は拝観できませんので、どうぞご了承下さい。
平成 22年10月28日(木)、29日(金)
11月24日(水)、25日(木)

第40回

西日本菊花大会のご案内

神郡宗像に菊の季節が到来しました。九州各県を中心に、全国の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた銘花約三千鉢が、境内中に展示されます。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、この他に大臣賞が十一本授与され、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれています。

期間中は、観菊者、七五三詣での家族連れなどで賑います。また菊苗・菊鉢の販売、勅使館をこの時期限定で特別に開放「抹茶コーナー」、豪華景品が当たる『菊みくじ』、宗像観光協会の運営する『いっぷく茶屋』なども開かれています。是非、御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

会期 平成22年11月1日(月)～22日(月)

時間 終日

会場 宗像大社境内

拝観料 無料 **駐車料** 無料

（続）海の寄物

250

いしい ただし

昭和十八年二月、堺氏がガ島から撤退したのは「私の体力は極限に達していた。一人歩きも覚束ない状況であった時である。中隊長から今夜軍艦が迎えに来る。転進作戦だ。頑張れ」と告げられた。戦友に助けられながら夜間に小舟で沖に待機していた駆逐艦に乗って脱出。無事にブーゲンビル島へたどり着いた。

直ちに野戦病院へ入院したが、軍医の横柄な態度に激怒。病院を出て隊に戻ったら隊は今日駆逐艦で転進とのこと、ニューブリテン島のラバウル港に上陸した。病院は翌日爆撃を受けたというから、強運の持ち主である。

9月中旬 元気な境氏

兵站病院へ四月二十四日に入院。それからまもなく病院船に乗りフィリピン・マニラ港へ。マニラ第十二陸軍病院へ入院。この時体重を測定したら、何と三十六キロ、骨と皮だけとなっていた。九月に退院、原隊復帰。十一月十一日に昭南島（シンガポール）上陸、クアラルンピール駐屯を命じられている。

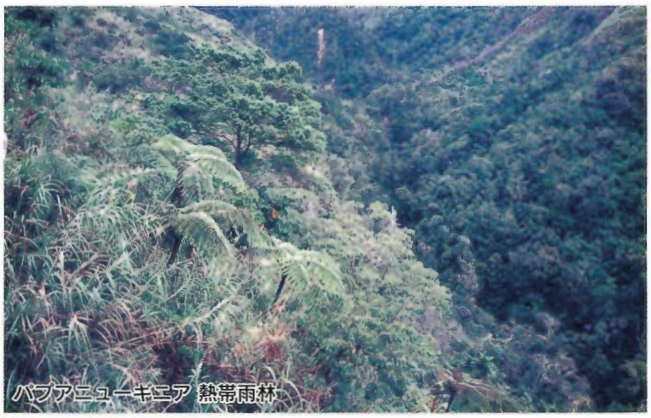
昭和十九年（一九四四）二月にマライセンバンから出港し、三月十五日～七月十七日までビルマ・シンデンカレ警備、ビルマ断作戦に参加、その後各地を転戦している。

降伏を勧告するビラ

さて昭和十八年二月、ガ島の撤収作戦が完了。四月七日には暗号を解読された連合艦隊司令長官山本五十六は、ブーゲンビル島上空でアメリカ空軍機の待ち伏せを受け戦死するという日本国民に大きな衝撃と落胆を与えた。国民も戦局の厳しさを、うすうすと感じはじめていた。

五月十二日には、アリューシャン列島のアッツ島守備隊（山崎保代大佐）が玉砕、戦線の拡大、制海、制空権をうばれ食糧も戦う弾薬、火器は絶たれ、太平洋に展開する日本軍は置去りになったのであった。

今年八月、NHKは「戦争の証言」で「アッツ島玉砕」をとりあげていたが、守備隊からの救援の要請を無視し見殺しを決定している。戦争画（作戦記録画）にも「アッツ島玉砕」を大画家藤田嗣治が描いているが、これまでの戦争画にない迫力はこれからの日本軍の運命を暗示したものになっている。これは「戦争画ではない」、「国民の前に出すのはどうか」という意見もあったという。以後玉砕はつづく。

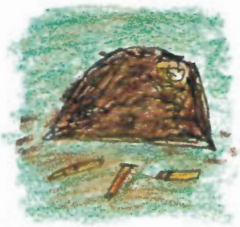


パプアニューギニア 熱帯雨林

私が一九八五年に旅した東部ニューギニア（現パプアニューギニア）では、投入された兵力約二十万。うち東部第十八軍※隷下部隊だけでも約十万名（九六、九四四人）のうち生還者はなんと八、八二七名であった。（ニューギニアの戦い）※隷下（配下の意）

ラエの飛行場横の椰子林には旧日本軍の高射砲が赤く錆びて放置されていたしマダンの海岸には機関銃が据えられたままであった。

案内の現地人は「この山の麓には重爆撃機の残骸がある」とか、「ここのジャングルには日本兵の鉄カブトと銃弾が散乱している」と語っていた。



鉄カブト

今年八月の週刊新潮（八月二十六日）には「六十五年目の夏・東部ニューギニア戦線を訪れて」のグラビアには、現地に放置されている日本の爆撃機「呑龍」の残骸、そして日本兵の頭骨や大腿骨が「見せ物」として展示されている。写真説明には「日の丸の下に置かれた頭蓋骨は風化を防ぐため幾重にもニスが塗られ変色してしまっている」。現地人が掘り出して観光客にお金をとって見せているのだ。

第五九〇回 宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日〆切

北九州市　八幡西区　豊田　光子

生きてゐるものの営み終戦の八月十五日がわれの原点

評 作者の下の句の言葉には重みがあるが、二句が〈われの原点〉とどう結びつくのかが不明。戦争を生き抜いた作者なのか、命の大切さを訴えるものと思われるが惜しい。

福津市　若木台　山崎　公俊

海を向く鳥居をみがくごと揺れて樟は枝張る辺津宮の朝

評 潮風が感じられるような一首。樟の枝が揺れると張るが分かれると微妙な違和があるので、語順を変えて樟の張る枝が揺れて鳥居をみがくようだとしたい。

うきは市　浮羽町　向　則正

道の辺の可憐に咲ける捩摺の無残に刈られ雨に濡れゐる

評 刈草の中に捩摺の花を見つけた作者の目が良い。可憐さ、無残さは言葉にせず、具体で表現すると読者にも景が見えてくる。二句、咲けるは過去のことなので、咲きしに。

福津市　中　央　池浦千鶴子

久々の一人の昼餉お土産のうまき梅にて茶漬となせり

評 鬼の居ぬ間のなんとやらで、気楽にひとりの食事を楽しむ作者が梅のお茶漬けで表現されている。茶目っ気のある楽しい一首。

宗像市　田　久　巻　桔梗

よき材を推して敲いて彫りぬいて残丘のやうな歌を詠みたし

評 歌に精進しようとする作者の熱意は尊い。力が入りすぎ。残丘を活かすためには二句、三句に強すぎない言葉を。動詞は一首に三個までという説もある。

宗像市　日の里　大和美由紀

夏の朝親離れせし鵯がたよりなき声で庭に鳴きをり

評 鵯の若鳥を案ずるやさしい作者。二句、親離れでは人のようなので、〈巣立ちをしたる〉が良い。たよりなき声とはどんな声なのか、一歩踏み込む表現も試しましょう。

北九州市　戸畑区　田中ハツセ

南米を旅人と共に旅をするテレビがあれば行けぬ私も

評 ささやかな喜びをたいせつに詠む作者が良い。テレビの旅番組なので、旅人をタレントとするとより解りやすくなる。

福津市　若木台　野間　精一

菜園の境の真白き一画に近づきゆけば蕎麦の花なり

評 なにげない菜園の風景を詠んだしずかで美しい一首。二句を〈はずれの白き〉結句を〈蕎麦の花咲く〉としたい。

福津市　星ヶ丘　佐々木和彦

撒きすぎるほど水をまき日中の土の火照りをやや鎮めたり

評 ことしの夏の残暑は驚くばかりだった。夕方、庭か畑に撒きすぎるほどの散水をしてようやく火照りが鎮まりほっとする作者。結句のややに作者の感慨が出ている。

宗像市　平　井　占部　詩子

今朝秋の忘れものめく雲ひとつ放浪のごとき旅恋ふ雲は秋

評 上の句の詩情が良い。結句の雲、秋は重なっているので〈旅にいざなふ〉としてはいかが。

北九州市　八幡西区　吉田ウト子

裂織のタペストリーの文の背負籠妣の旧りたる大島袖

評 女性ならではの衣装、手芸にかかわる一首。動詞が一つも無いので、四・五句を〈妣のかたみの大島で織る〉とすると落ち着く。

宗像市　東旭ヶ丘　天野　玲子

父、母の迎え火子らと焚きたれど送り火は夫と二人して焚く

評 お盆に里帰りした子供たちとにぎやかに焚いた迎え火と、家に残った夫婦ふたりで焚く送り火のしめやかさ。事実を並べなお哀感が残る。

宗像市　大　島　杉田　禮子

新盆の御霊を送る御詠歌の流るゝ波止を船離れ行く

評 情感のある良い場面を詠まれているが、この船が精霊舟なのか渡船、漁船なのか迷った。結句で例えば〈フェリー出でゆく〉〈精霊舟離る〉などとすれば解りやすい。

北九州市　八幡西区　遠藤　幸子

月光に応うる如く虫あまた初秋の宵の楽とし聞くも

評 厳しい残暑の中にもたしかに季節は移っていて毎夜虫の音がきこえる。それを音楽として楽しむ作者。三句〈鳴く虫を〉結句〈楽として聴く〉としたい。

福岡市　南　区　井田有久衣

伊勢路へと夫の遺影を胸にひめ孫を伴い夜行バスにて

評 こころはいつも亡くなったご主人と一緒の作者。言葉の順序を変え、〈孫を連れ夜行のバスで伊勢に発つ夫の遺影胸に秘め持ち〉としてはいかがでしょうか。

選者詠

畦に咲く真赤き曼殊沙華の線たどりてゆけば彼岸に着かん

もうどこかで金木犀が咲いてゐて湯殿の窓にその香ただよふ

第五六五回 俳句作品集

宗像市　武丸　白土　凌一

暑き日に海水浴や楽しけれ

編集後記

先月号ではつたカブトムシの卵は、その後約三十個ださらに増え気付くとふ化し幼虫となっていました。その数、約六十匹。驚く早さで大きくなっています▼全て羽化させようとすると膨大な数ですので、もう少し大きくなったら少し残して、あとはお宮の境内にお返ししようと愚息を誘ってみます▼さて、パワースポットが止まりません。一過性のものかと思いきや、さらに拡がりをみせ大手出版社や行政までもが取り上げ始めました▼恐らく全国津々浦々どこに行ってもある神社やその祭礼、存在は知っていたが詳しく知らないといった状況をマスメディアが触れることによって、ニーズと合致したためでしょう▼自らが生まれる前から存在し継承されているもの、その代表的なものが神社や祭礼であり、学校で教えない日本人のDNAを、パワースポットがきっかけとなり目覚めさせてくれることに期待しております。（塚）

発行所 宗像大社社務所 宗像会

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311（代）
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延
制作 ゼネラルアサヒ
印刷 ゼネラルアサヒ

毎月1日発行 定価1年送料共1,000円